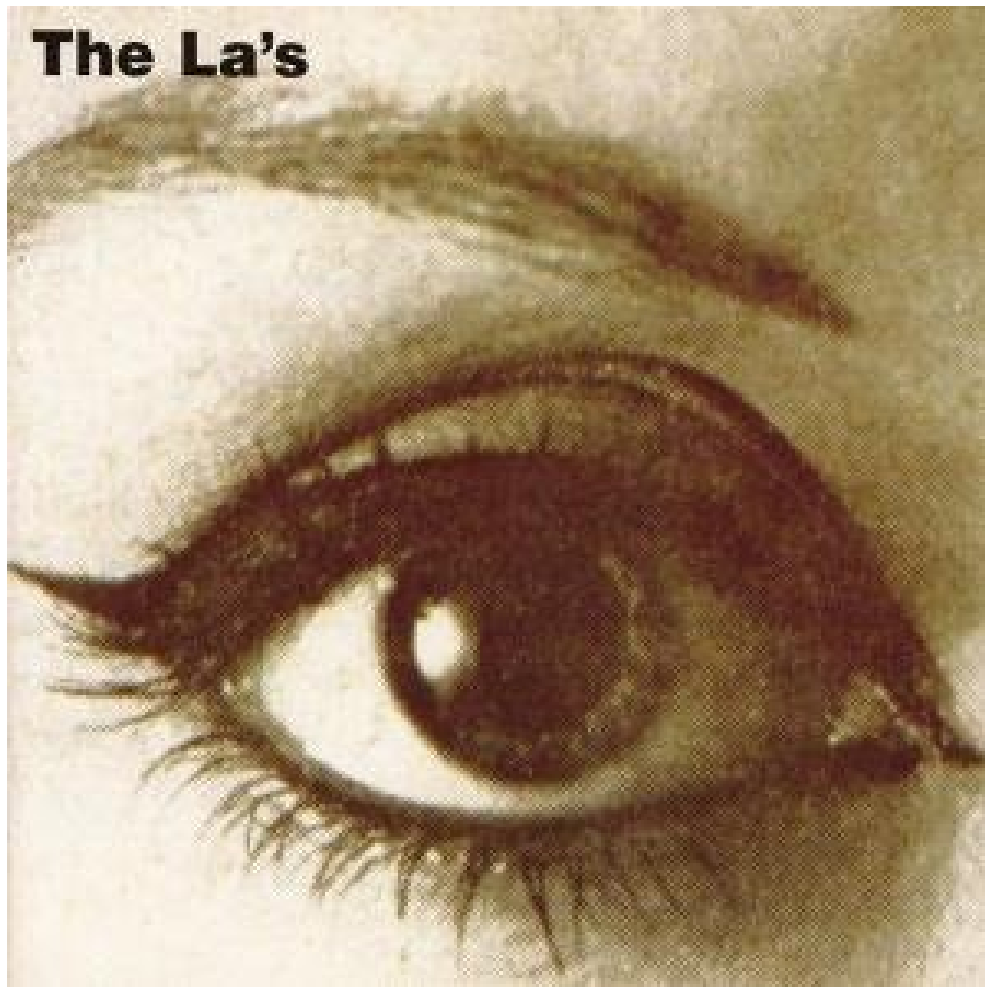


The Possibilities
Of
Present Independent Works



2006.07.12 MORIMURA-KAWAMURA SEMINAR

NAO SATO

1. Introduction

まず、私のもとのテーマは「ポピュラー音楽とアート」だったのですが、いろいろな方からアドバイスをいただき、同じ音楽の分野で気になっていた、①リヴァプール②リヴァプールのインディペンデント・レーベル③最近の音楽界の変動、についての研究をしよう、と変更しました。どれもただ単に私が好きなものだから調べていったものなのですが、意外に全部が一本の線で結ばれて、③に関しては音楽だけでなく映画やアニメの分野でも起こり始めているということが発見し、なかなか面白くなってきている、ということがわかりました。そして、調べていって一本の線が伸びていくうちに、また意外なところにたどりつきました。なので今回は少し、長いバックグラウンドの説明みたいになってしまったかもしれないのですが、ご了承ください。

2. Music for Sale

言うまでもなくレーベルにとって「音楽」とは「商品」である。
しかもこの「商品」は製作する費用も、得られる儲けも、正確に予測することはできない。

《音楽CD製作費用の内訳》

録音・スタジオ代などの原版製作にかかる費用—60%

編曲料や演奏料などのパフォーマンスに関わる費用—35%

デザインやジャケットなどの制作費—5%

⇒音楽ソフトで最も重要かつ価値の源泉となるものは、音楽そのものを産み出す能力・人間

しかも、実際に消費されてみないとその「商品」の質がわからない。

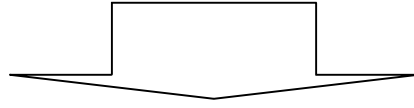
⇒「過剰なプロモーション活動」と「社会的背景にまつわるマーケティング論」が重要

⇒巨大資本を持つビッグレーベルばかりが存続・独占

情報デジタル化・音楽配信事業に備えた変革…世界的なメジャー・レーベル同士の統合

(ex)1999年カナダのシーグラムによって進められた、アメリカのMCAレコードとオランダのポリグラムという(世界6大メジャー・レコード会社と呼ばれるうちの)2つのメジャーレーベルの統合によって生まれたユニバーサル・ミュージック・ジャパン。

- 多量のコンテンツの保有とその一元的・有機的な管理⇒音楽配信という新たな事業へ
- 事業整備
 - ①ディストリビューション機能(配給)の放棄 (＝営業機能を完全に他社に委託)
→音楽配信時代にいち早くシフトするため
 - ②制作・宣伝部門の人員削減 (＝経営効率化)



少ない種類の音楽を多量に売ろうとしている
ユニークで独自性に富んだポリシーを持つインディレーベルの増加に拍車

3. Liverpool

リヴァプール出身のアーティストと言ったら何はともあれほとんどの人がビートルズを思い起こすでしょう。他にも The La's や The Coral などの素晴らしいアーティストを輩出しています。

彼らの音楽の特徴とは何か？ リヴァプールはご存知のとおり、昔は世界で1、2を争うほど繁栄した港町だったので、世界各国の文化・流行・音楽がいち早く伝わってくる場所でした。またそれと同時に多くの移民もこの街に流れ着いてきています。なのでリヴァプール(を含む多くの北部都市)にはたくさんのアイリッシュ系・ウェールズ系移民がいます。彼らは自分たちの中に“ケルト”というルーツ的なものを持ちながら、新しいものにどんどん手を伸ばし、それらをミックスして独特な新しいものを作ることもやってのけます。伝統的でありながら未来的な、タイムレスな音楽をつくれるのです。

4. Local Music Scene

このように、リヴァプールの他にもグラスゴーやマンチェスター、シェフィールドなどの地方都市にも、その街特有の雰囲気を持つ良質なミュージックシーンがもともと存在している

…ときどき注目されたりされなかったり、の問題

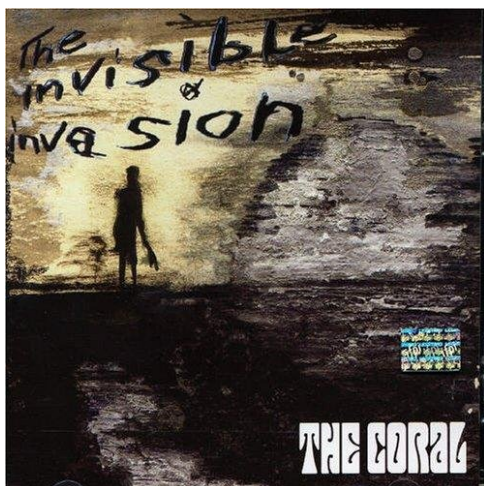
⇒発見されるのを待っている状態

5. Independent Label

ここでは2000年1月のミレニアムと同時に設立された「デルタソニック」というまだ新しいインディレーベルを紹介しようと思う。設立者はリヴァプール出身で自身もリヴァプールの音楽シーンにいたアラン・ウィルズ。地方都市リヴァプールにレーベルを作った理由を語っている。

「僕たちがリヴァプールにいてロンドンに動かないってことも、僕たちがうまくやれている理由のひとつだよ。僕たちは『商業的』の興味の外にいるわけだ。ロンドンに行くと、みんなが気にしていることといえばセールスの枚数が落ちたこととか、インターネットで海賊版が出回ることとか、とにかくそんなことばかり。僕たちはそんなこと気にしてないからね。音楽のことしか考えていない。このバンドが好きかどうか。どうやっていいレコードを作るか。今、そういった気持

ちを持った仲間ではいろんなことが出来るチームを作ろうとしているんだ。たとえば、ビデオも自分たちで撮影できるチームを作っている。まだ若いんだけど二人ほどいるんだ。彼らが現在、僕たちのビデオを全部撮っている。最近若いプロデューサーも二人ほど発掘したんだ。まだ無名だけど、素晴らしい才能を持っている。こうやって、僕たちはまだ誰も知らない才能を発掘しながら、僕たちのチームを作ろうとしているんだよ。」



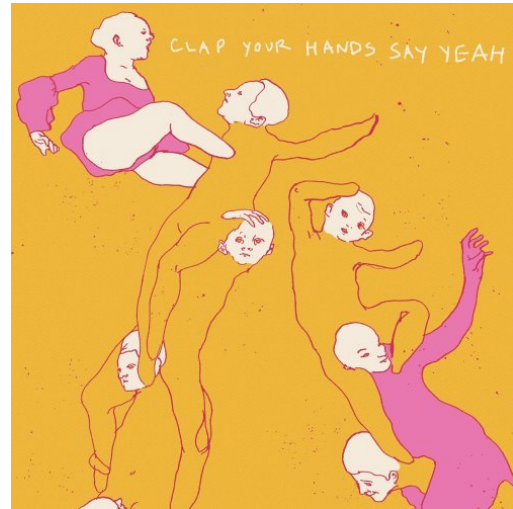
The Coral – The Invisible Invasion

6. Do It Yourself

去年一気に世界で起きた現象。カナダのアーケイド・ファイア、イギリスのアーケティック・モンキーズ、アメリカの clap your hands say yeah など…ただ良い音楽を作っていれば、過剰なプロモーションやレコード契約にがんじがらめになることなく、人々に知られ愛されていく…という現象。共通するのは、インターネットによるロコミとライブの面白さ、場合によっては無料ダウンロードなど、レコード会社の手をそれほど借りることなく、世界中で支持を得ることになった、ということ。



Arctic Monkeys



Clap Your Hands Say Yeah

CYHSY「アルバムを作ったらいつかはそれがどこかのレーベルの目に留まるだろうと思っていたら、そうはならなかった。だから自分たちでリリースしてみたら、すぐに手に入れたと思う人たちが何人もいてくれた。結局、自分たちでうまくやれているなってことになった。」

Tarnation—監督・編集・主演: Jonathan Caouette(2004年)

31歳のジョナサン・カウエットが、11歳の頃から撮りためた膨大な写真や自主映画、留守録のメッセージ、ミュージック・サンプルなどをi movieを使って編集し、2万円で作った映画

JCM「『ターネーション』はもうずっと手軽な新テクノロジーの約束を証明してくれる映画だ。アウトサイダー・アートの最初の映画傑作だ。音楽、文章、ビジュアル・アートの世界ではずっと可能だったのが、今ようやく映画で可能になったんだ。」(ジョン・キャメロン・ミッチェル)

GVS「彼のような少ない予算でこれほど感動的な作品を誰かが作るのを僕は待っていたような気がする。いつかこういうものが出てくるとは信じていたけれど、ようやくそのときが出てきて嬉しいよ。」(ガス・ヴァン・サント)

7. Next Stage... & In The End

メジャーがやってきたことはインディを活気付ける要因になってしまっていたのではないか。結果、音楽を選ぶのも、入手方法を決めるのも、我々に主導権がまわってきたのかもしれない。そしてさらに簡単に発信者になることもできる環境も整いました。つまり、自分でつくり配信し、またはいいものをつくっているだけで誰かが広めてくれて、多くの人から認められることが可能になったのです。この状況は音楽だけでなく、もっとも若い芸術家たちにも適用されるのではないのでしょうか。例えば Fotologue で写真を見せたりするのも発表・宣伝の場の一つであるといえるでしょう。

活動の幅が広がり、自分の売り込みもしやすいし、へんな影響を受けたり、騙されたりも少なくてすむかもしれないし、なによりこれからはオリジナリティ溢れる強烈な作品がたくさん出てくるかもしれません。しかしそのためには、次の段階としてビジネスの確立が必要になってくるでしょう。

さらにもう一つ気になる点は、(メディアが移行したといっても消えることはない)CDのジャケット・インナーアートワーク・ビデオクリップ・DVD作品・ウェブ…など、芸術面作業の増加です。さらにライブなども巨大化・設備の充実など、凝ったパフォーマンスが可能となり、表現の場・アート面での表現がどんどん増えています。その場合、インディーズの場合はなんでも自由に追求・表現することもできるので、それらを自分たちや友人で作る場合が増えてきた気がします。しかしさすがに自分たちで出来ないところはカバーしてくれるサポートチームが必要になります。それが、アラン・ウィルズが言っていた“自分たちだけで出来るチーム”です。そうしたらそのうち、制作も自らで行い、アートワーク系も自分たちまたは友人たちで行い、映画やウェブなどの表現も行っていく、1アーティストでプロダクションチーム、みたいなもっと独立して面白いことをやろうとするカタチも出てくるかもしれません。音楽とアートのつながり、ミュージシャンとアーティストのつながりがもっと密接で、面白い事になっていくのではないだろうか。

参考文献

東谷 護 『ポピュラー音楽へのまなざし』 勁草書房 2003年
雑誌 『cookie scene vol.32』 B.I.PRESS 2003年